アルザス語

真崎　隆治

20数年前にストラスブールを訪れたのは、この町が宗教改革時代に寛容の精神をかかげて大きな役割を果たしていたことへの関心と、ここの大学にカルヴァン研究の大家ヴァンデル先生がおられたからである。残念ながら先生は私の到着を待たずに世を去られ、ついにお目にかかれなかったのだが、そのかわりにアルザスという土地とそこの人々に深く関わることになり、以来アルザスは私の第二の故郷のようになった。

アルザスはフランスの東端、ライン川とヴォージュ山脈にはさまれる美しく肥沃な平野だ。ヴォージュの山から見おろすと、はるかに広がる緑の畑の海原のところどころに村落が島のように点在し、教会の尖塔が灯台のように立っている。山の麓あたりはブドウ畑だ。東西50キロ、南北200キロ、川向こうはドイツである。

この土地の豊かさが大国の関心をそそった。それと、東側の大河と西側の山脈という、いずれも国境とするのに恰好な地理的条件が災いした。1648年の神聖ローマ帝国崩壊から第２次世界大戦にいたる 300年間、アルザスはフランスとドイツの間での争奪の的となる。国が変わると支配国の言語が強制される。ドーデの『最後の授業』はこのあたりを描いて有名だ。もっとも彼の観点はフランス中心にすぎて、アルザス理解としては正当なものといえない。アルザスの人々がこの作品をさして評価していない事実がそのことを雄弁に語っている。だいたいアルザスの人々はフランス語を禁止されても痛痒をおぼえなかった。なぜならアルザスにはアルザス語という固有の言語があったからである。これは４・５世紀のゲルマン民族の移動のさいにこの地に住んだいくつかの民族の言語が複合的に定着したもので、中世ドイツ語の化石のようなものだ。たとえばドイツ語のグーテン・モールゲンはギュアタ・モーリアであり、そのアクセントは歌のようにうねり、可憐である。

アルザスの人々はいかに言語を強制されようとも、アルザス語のあるかぎり困ることはなかった。ドイツにしてもフランスにしても自国語を強制しようとしたのは同じであったが、アルザス語を敵対語として禁止するいわれはなく、公文書における自国語使用と日常生活における学習の奨励ぐらいがせいぜいであった。アルザスの人々はアルザス語によって自らの独自性を守ってきた。アルザス語こそは彼らのアイデンティティーを形成する核であった。

ところが、このアルザス語がいま歴史から消滅しようとしている。

40代から上の人たちはアルザス語を母国語として育ち、フランス語は小学校に入ってからの習得言語である。それが20代の若者になるとフランス語が母国語であり、アルザス語はもはや知らないので

ある。家庭で話されなくなったからだ。交通の発達により夫婦がアルザスの人とはかぎらなくなった。またアルザス人同士の家庭でも、子供の将来のためにフランス語重視が徹底してきた。この土地がこれからの世界に生き抜くためにも、個々人がフランスという国で生きていくためにも、アルザス語はあまりに特殊でありすぎるからだ。それと同時に、今後はこの土地が大国の争奪の対象とならないという民族本能的嗅覚が働いてのこともあろう。役立たないものを苦労して身につける必要はないのである。

かくして、次の世代とは言わないまでも、2世代後にはアルザス語は確実に姿を消す運命にある。ひとつの言語が歴史から消えていくのはなにも珍しいことではない。しかしその歴史的瞬間に立ち会うことはそうあるものではなく、粛然とならざるを得ない。そして、文化の根源に言語があるとすれば、アルザス語を失うアルザスの文化は変質していくしかない。伝統を重んじながらも伝統を越えて力強く生きるために、彼らはいま根源的な問を自らに課しているのだ。21世紀はアルザスにとってまさに真に新しい世紀となるであろう。

（まざき　たかはる
所員、文学部教授）